花とクスリ

札幌市医師会
宮の森病院
村上嶽四郎

美しい花は見る者を感動させ、眺めるだけで良薬の効がある。一方、花の中には目を楽しませ癒しを与えてくれるだけでなく、その花植物の持つ成分が薬効を持ちクスリとして役立っているものもある。面白い例をいくつか示してみよう。

＜クロッカス＞

春の到来を告げる薄紫のクロッカスは大地の息吹を感じさせ、その可憐さは人を魅了する（図１）。香辛料の「サフラン」は秋咲きクロッカスのメシベの柱頭を乾燥して作る。別名「赤い金」とも呼ばれる。香辛料調味料の他に健胃、婦人の通経、鎮痛剤としても使われている。本場スペイン料理ではパエリアやブイヤベースには欠かすことのできない香辛料として用いられているのは広く知られている。煮え切った鍋にサフランの一掴みを振りかけると輝くばかりの黄金色に染まる。クロッカスの花一輪からわずか３本しか摘めないメシベである。グラム単位で宝石なみの扱いとなる。砂漠や荒野でブドウもオリーブも育たない土地に天が与えた恵みの花「赤い金」と言われる所以である。スペイン産サフランの大部分はわが国が輸入しているという。そして驚くべきことに、その大部分は食用としてではなく薬用として婦人科薬となっているのだ。

＜タンポポ＞

原っぱや土手に点々と黄色に咲くタンポポは、フキノトウと共に雪国では雪解けを知らせてくれる風物詩の一つでもある（図２）。タンポポは純粋な和名であるがその由来については異説もある。花の咲き終わった姿が太鼓を連想させ、その音のタンポンポンから来た（柳田邦男）。中国名ポポチン（婆婆丁）の丁と婆婆の順序が入れ替わってチンポポとなった（与謝野寛）。このタンポポをヨーロッパでは食用に栽培しているが食べるのは花でなく葉の方である。花が咲き終ってからでは葉が固くなって売り物にならず“花が咲いたら売れないタンポポ”となっている。フランス語ではタンポポの事を葉のギザギザした姿から連想してライオンの歯「ダンデリオン」と呼ばれている。これが英語になると「ダンディライオン」となっている。鋭い歯よりも円を描いて並ぶ黄色い花弁の様がダンディに気取るライオンの襟巻状のタテ髪により強い連想を巡らせたのでしょう。タンポポの葉は煎じて利尿剤として用いられている。そのため、フランス語の別名「ピッサンリ」（寝小便・おねしょ）があり、こちらの方が一般的に使用されている。それにしても、洋の東西で「チンポポ」と「おねしょ」との呼ばれ方には笑ってしまう。れっきとしたフランス料理店でメニューにタンポポのサラダが「おねしょのサラダ」（Salade de pissenlit）と実際に載っているのもお笑いだ。

＜ジギタリス（キツネノテブクロ）＞

二つの名前を持つこの植物は、薬用植物として重点のある時はジギタリス、草植物としてはキツネノテブクロと呼ぶ（図３）。名前の由来は、ジギタリスは手指（ラテン語でdigitus）に似ている。別名のキツネノテブクロ（foxglove）は狐の手（袋）からの連想から付けた名前であろう。ただ、キツネと名前が付いた植物、キツネの絵筆、キツネの剃刀などでは形が連想を呼ぶだけでなく悪臭を放ったり、有毒であるなどの警告も込められている。この植物の姿形は立葵に似ていて背が高く、花は茎の頂きから鈴なりにぶら下がる赤紫色の鐘状花である。1785年イギリスのウィザリングによってジギタリスは強心利尿剤として紹介された。以来世界中で広くうっ血性心不全の治療に用いられてきた。現在では有効成分が抽出され他の品種も含めて強心配糖体として循環器領域の治療には必須のクスリである。ジギタリス療法は心不全に著効を示すものの中毒の恐れも有り鋭い諸刃の剣を扱う技が必要となる。この負の作用の警告が名前にfoxgloveとキツネの付いた所以であろう。

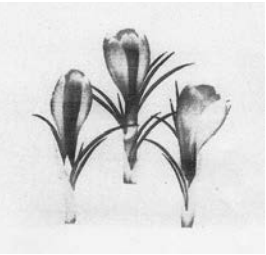

図１　クロッカス

図２　タンポポ

図３　ジギタリス